

# W.B.イェイツとモード・ゴーン

— イグザイルの詩人 —

日 下 隆 平

は じ め に

英国とアイルランドの関係を歴史的にみてゆくと、両国の関係に大きな役割を担った人々がいる。典型的に言うならば、英国にあっては積極的にアイルランドに係わり自国で果たせぬ理想を実現しようとした人々である。またアイルランドにあっては英国社会に解け込んでいった中産階級のアイルランド移民であった。そして両者は変革期のアイルランドに一定の文化的・政治的貢献を行った。この論文はまず歴史的にその2つの類型を明確にしたうえで、前者の例としてホーニマン、モード・ゴーンなどの人物を、後者の例として19世紀のジャーナリストや詩人イェイツなどの人物を中心に扱いながら両者について検討してゆくものである。

植民地時代の英国のアイルランド観はエリザベス朝時代の詩人エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) に由来すると言われる。スペンサーは16世紀末にグレイ卿の秘書官としてアイルランドに渡った。彼はそこで『妖精女王』<sup>1)</sup> (*The Faerie Queene*) とともに『アイルランドの現状について』 (*A View of the Present State of Ireland*) を書いた。その中で彼はアイルランドを征服者に帰属する国家とし、その人々を英国とは対照的に粗野な人々とみなしている。彼は反逆するアイルランド人に対して嫌悪を抱く一方、その美しい風光をこよなく愛した。彼は野蛮なアイルランド人は撲滅されるべきだと言うような大胆な提言すら述べている。<sup>2)</sup> このようにスペンサーはアイルランド人を嫌悪する一方その美しい風景を自分の詩のアルカディア

(Arcadia) とみなした。植民地時代の英国人のアイルランド観・アイルランド人の英国観が再検証されつつあるとき、スペンサーのような観念の対象としてと同時に、社会不安の要素としてみるアイルランド観は19世紀末まで継続されたと言われる。

世紀末にルナン、グリアソン、アーノルドなどによって一連のケルト民族再評価がおこなわれたとき、アイルランドは夢、観念の対象と考えられた。これは粗野なアイルランド人よりもアルカディアとしてのアイルランドのイメージが強調された<sup>3)</sup>と言える。さらにいうならこれらの見方は植民地的観点からサイドがオリエントについて述べたのと同じ文脈で理解されよう。<sup>4)</sup>

## 1. 英国人のアイルランド人像

19世紀の急速なアイルランド移民の増加は英国・アイルランド双方の国内事情に基づくものであった。英国側では産業革命後、労働力を必要とした事情がある。アイルランド側では、1840年代の有名な馬鈴薯飢饉によって俗に“Hungry Forties”と呼ばれる移民が生まれた。さらにもう一つの大量移民の原因としてアイルランド社会の内発的要因がある。つまり不在地主による搾取的かつ永続的な土地保有のシステム並びに大家族制度が人々を農地から引き離す原因となった。さらに大きなレベルでは、飢饉の前から社会の中に恒常的かつ波及的な移民構造がすでに進行していたと言える。つまり、都市経済の発展に伴い、「農業社会から都市社会への移住」(Urbanization)がさらに幅広い型で起きたものと現在では一般的に理解されている。彼らは海を渡りリヴァプール、グラスゴウ、ブリストルなどに入港したのち、大都市に主として定住していった。彼らの大半は極貧の移民であったことから一定の固定観念がつけられていった。彼らについてのイメージとはつぎのようなものであった。アイルランド人は英国の都市を膨脹させた。スラムに密集して住みコレラなどの病気を持ち込んだ。暴力沙汰を起こした。ストライキ破りをして、英国人労働者の生活水準を落とした。さらには怠惰でゲッターか

ら浮かび上がろうとしなかったなどというものである。<sup>5)</sup>

しかし彼らのなかにはエンゲルスが描いたように貧民<sup>6)</sup>ばかりではなく、少数であったが高度な技術や知識をもった者もいたことが知られている。彼らはプロテスタント系のアイルランド中産階級の移民であり、医師やジャーナリストに携わる者が多かった。彼らは移民したのち、社会に解け込み英国の中産階級となった。その暮らしぶりはアイルランド海を往復しながら、英国の政治に参加し、英国の書物を読み、英国の教育機関で学び、英国内で仕事を見つけるといったいわば目立たぬ英国人としての生活であった。一般的にアイルランド移民は大雑把に捕らえられる傾向があるが、出身地域・宗派などさまざまな多様性を持っていた。そのなかにあって貧民以外に野心的な中産階級がいたことは注目されねばならない。<sup>7)</sup>

こうしたなかで出世型の古典的タイプとして良く知られた人物に、エミリ・ブロンテ (Emily Bronte) の父親や、コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) の祖父 (挿絵画家) がいる。エミリの父親は評伝<sup>8)</sup>『エミリ・ブロンテ』によれば、ダウン州の貧農の出だった。彼は狭苦しい小屋で、プロテスタントの父とカトリックの母のもとに1777年に生まれパトリック・ブランティーと名付けられた。ブランティーは「自分の卑しい生まれを人々に知られるのは忍びなかった」<sup>9)</sup> ためか、「自分の過去をできるかぎり隠しとおそうとしていた」<sup>10)</sup> 彼は教区牧師の援助で大学教育を受け、英国国教会の牧師という名誉ある職に就くことができた。当時国教会の牧師職は、貧しいけれども頭の良い男子にとって、立身出世の機会であった。

ブランティーはケンブリッジ大学に進み、パトリック・ブランティーという名で入学して、卒業時にはパトリック・ブロンテと名を変えている。ブロンテは1807年国教会聖職者 (Anglican Priest) として任命された後、彼は二度とアイルランドの地を踏むことはなかったといわれる。

次にアイルランド中産階級の移民が最も成功したと言われる出版分野での主な成功者についてみてゆきたい。彼らに共通しているのはアイルランドですでに新聞記者や雑誌編集の経験を活かしていることだった。さらにカトリッ

ク系の地盤をもとに成功していった。19世紀前半の作家ジェラルド・グリフィン (Gerald Griffin 1803-1840) はこの頃のホーリ・ヘッドの定期船について皮肉を混じえながら、「アイルランドの外ならどこでも苦勞なく富と名声が得られると、本気で思い込んでいる人々」が乗っていたと描いている。彼らは文官試験や新聞雑誌記者の見習いを終えてロンドンで一旗揚げようとする中流層のアイルランド人だった。彼らは野心的なアイルランド中産階級の出世第一主義者であった。<sup>11)</sup>

そういうグリフィンもまた先輩の移民作家ジョン・バニム (John Banim) の知己を得て20才になったばかりでロンドンへ行った。彼はロンドンで作家の下請けなどの貧しい時代を経て成功していった。当時のロンドンのジャーナリズムではアイルランド人の成功者が力を振るっていた。

何人かその例を挙げてみよう。アリングム (William Allingham 1821-1889) はドニガルの出身であり、作家となる前は税官吏としてつとめていた。その後ロンドンに渡り『フレイザーズ・マガジン』(*Frazer's Magazine*)の編集に当たり、テニスン、ブラウニング、カーライル、ロセッティ等と親交を結び英国で没した。彼は英愛関係についてナショナリストと異なる立場に立ったが、一貫してイギリス帝国主義に反対し農民を支持しアイルランドの土地を愛したことは良く知られている。チャールズ・ダイヤモンド (Charles Diamond) はマグヘーレ (Maghere) からニューカッスル (Newcastle) へ移民した後カトリック系の読者向けの出版で財を成し、37誌を擁する出版帝国を築いた。

非宗教的出版分野でも、アイルランド人は傑出していた。フーラン (Hoolan) やドーラン (Doolan) をはじめ、『ペル・メル新聞』(*Pall Mall Gazette*) のジャック・フィンカーン (Jack Finucane) などが、ロンドンの大衆文学世界の中央で活躍した。のちになると、カトリック中産階級からオコナー (T.P. O'Connor), マッカーシー (Justin McCarthy) などが現れた。オコナーは『デイリー・テレグラフ』(*Daily Telegraph*), 『ペル・メル新聞』に勤務したのち、『スター』(*The Star*), 『ウィークリー』(*T.P.'s*

*Weekly*) を率いて成功を収めた。またマッカシーは、コーク (Cork) のジャーナリズムからロンドンの新聞社街 (Fleet Street) に移り大成功を収めた。彼はその後政治家に転身してパーネル派の代議士となり、パーネル亡き後のアイルランド国民党の指導者となる。彼は『あるアイルランド人の物語』(*The Story of an Irishman*) という自叙伝を書いた。のちに、彼は「このイギリスに於いて私の宗教と政治がジャーナリズム・文学の活動をするうえで何ら障害となることはなかった」<sup>12)</sup> と述べている。

それより前にすでにトロロープ (Anthony Trollope) は『フィニアス・フィン』(*Phineas Finn*) で作中人物としてマッカーシーのような男を立身出世型のモデルにしている。<sup>13)</sup> そのなかで貧しいカトリックの医師の子として生まれたフィンは、聡明な頭脳と魅力によってアイルランドのアイデンティティに執着しながら出世してゆく。このように19世紀後半以降マッカシーのような成功者が何人も現れた。さらに、英国の二大政党間の対立によりアイルランド人の票を得ようとした政策、並びにパーネル時代にとまなうアイルランド政治状況の変化からイギリス人のアイルランド人対策には変化がみられた。その結果オコナー、マッカシー、フィンのような人物は、アングロ・アイリッシュ (“shoneen”) とされた。また、さらに上の階級のグレゴリー夫人の夫サー・ウィリアム・グレゴリー (Sir William Gregory) などは英国人の範疇にいれられた。<sup>14)</sup> つまり中流以上のアイルランド人とイギリス人の境界は次第に消えつつあった。このようなアイルランド人像の変化は中流プロテスタントの意識にも微妙な影響を及ぼした。その過渡期にある人物としてバーナード・ショー (George Bernard Shaw) の意識をみることでそれはいっそう明らかとなる。自叙伝で彼は「文化の担い手を生涯の目標とするアイルランド人であれば大都会に暮らし、国際的文化に触れる必要があると感じるものだ」<sup>15)</sup> と述べている。ショーは移民することに何の躊躇いも感じることなく、1876年に英国に渡った。彼に必要なのは国際的文化に触れることだった。彼の頃にはアイルランド移民という言葉が持つ独特の意味合いはしだいに風化していった。その後、彼は中立した立場で両国を批判している。

しかし、大方の英国人からすれば英国系アイルランド人が増えただけでスペンサー以来のアイルランド人像が継続したことも事実であった。

## 2. 19世紀の周辺の英国人

ここでは19世紀後半にアイルランドに深く関わった英国人に焦点を当てる。フォスターは彼らをその特徴から周辺の英国人（マージナル・マン）と呼んでいる。

トロロープ（Anthony Trollope 1815-82）はアイルランドに郵便検査官（resident Post Office surveyor）として来た。サッカレー（William Makepeace Thackeray 1811-63）は旅行者として立ち寄りアイルランド人の妻と結婚したことからアイルランドと関わりをもったが、その一方で彼はロンドンやアイルランドのジャーナリストや文学者と交流があった。『アイリッシュ・スケッチブック』（*Irish Sketch-Book*）のなかで、トロロープと同じようにアイルランドを理想が実現された場として、また当時の英国に失われた世界として描いている。またトロロープもアイルランドをテーマに小説を書いた。彼は個人的な問題を抱えながらアイルランドに赴任しその地に解け込むことでそれを解消した。「まもなく私はアイルランドの人たちが善良で利口だということがわかった。... 彼らが酒や賭博を好む性質だとしばしばきくが、浪費は彼らの性に合わない」<sup>16)</sup>と『自叙伝』で述べている。

さらに、彼は飢饉以前のアイルランドの状態についての綿密な記録作品も書いた。<sup>17)</sup> だが、彼には別の面もあった。歳をとるに従って彼の態度は変化しアイルランド自治反対を唱えるようになった。

他の周辺の英国人として、歴史家のフルード（James Anthony Froude, 1818-94）<sup>18)</sup>、ウィンストン・チャーチルの父で政治家のランドルフ・チャーチル卿（Lord Randolph Churchill）、さらには作家カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）らをフォスターはあげている。彼らに共通しているのは、いずれも初めはアイルランドに共鳴を感じたが、次第に自治主義に反

動的な態度をとっていったという点である。フォスターの見解に従えば、彼らはみずからの理想をアイルランドに求めたのであり、アイルランドへの対応は植民地主義による政治的優越意識から発するものだった。

19世紀にアイルランドと関係をもった英国人の態度は2つの面を持っていたといえる。つまり、アイルランド文化は腐敗しているため根絶しなければならないとする反面で、余儀なく移住させられたアイルランドをアルカディアとみなしたスペンサーの態度の系譜にあるものだった。アイルランドを自らの目的に用いた者はもっと情熱的にアイルランドと結びつく一方で、反カトリック主義、帝国主義と思えるほど激しくアイルランド自治に反対したのは決して偶然ではない。

19世紀末にはこのような系譜にある者としてホーニマンやゴーンが現れた。彼らについては後の章でアイルランドとの関わりを述べる。

### 3. ロンドンとイエイツ

1880年代から世紀末にかけてワイルド、ショー、イエイツなど著名な移民作家が英国文壇に登場した。イエイツは幼少時代から青年時代にかけてイギリス・アイルランドという二つの国で過ごした。仮にイエイツがダブリンを拠点にしていたなら、作家としてのイエイツはもっと変わっていたはずである。彼らは19世紀のジャーナリスト等のアイルランド中産階級の成功者の系譜にあった。イエイツの家系は聖職者を祖にもつプロテスタント中流階級のアイルランド人であった。妹リリーは、「私達はパーネル、ピアース、マッキヴィクス夫人、モード・ゴーン、デ・ヴァレラなどの聖人や政治の殉教者以上にアイルランド人といえます。でもこの人達のことを英国系アイルランド人だとは誰も考えません」と述べている。ダブリン社会は大部分がカトリック社会だが、その中でプロテスタント中流階級は英国社会との関わりが深く英国の周辺的特徴を持ちロンドンに最も近い階層といえた。

イエイツ自身の家系をみてみよう。<sup>19)</sup> イエイツ家は17世紀暮れにかけてリ

ネンの商いで財を成したジャーヴィス・イエイツ (Jervis Yeats) まで遡る。イエイツという姓はヨークシャーによくあるもので、ジャーヴィスはその地域からの入植者であると推定される。グラタン時代家業は繁栄したようで当時の高級住宅街であるウィリアム街にジャーヴィスの孫ベンジャミンは家を構えている。何よりイエイツが誇りにしたのはベンジャミンの妻メアリー・バトラーの家系がオーモンド伯につながることだった。この間の事情についてダンボイン卿によれば、第8代オーモンド伯の息子エドモンドは庶出とみなされたが、そのエドモンドからキルケニ地方に多くのバトラー姓がうまれていった。そのなかのひとつがメアリー・バトラーの家系であった。<sup>20)</sup> 両家の婚姻によってイエイツ家には僅かだがキルデアの土地と1532年まで遡るオーモンド伯の紋章入りの銀杯がもたらされた。その後三代下って、ジョン・イエイツはスライゴのプロテスタント系聖職者 (Rector) となったが、その子マシュー (Matthew) の頃には没落して土地も手放し土地売買斡旋業者となりはてた。

母の実家ポレックスフェン家は比較的新しい家柄の商人で手広く海運業や製粉業を営んでいた。性格的には、イエイツ家は社交的で、寛大かつ率直だった。それにひきかえ、ポレックスフェン家は蓄財に熱心だが、内向的な性質とされる。父親と同じようにイエイツも両家の家風の違いを意識していた。また彼は社会的地位という立場からプロテスタント的伝統を意識していた。<sup>21)</sup> さらに貴族のバトラー家に連なる家柄をととても大切にしていたが、ポレックスフェン家が商業に従事していたことにある種の引け目をもっていた。

またポレックスフェン家はマージナルな部分にあった。つまりスライゴのポレックスフェン家 (Merville) は近隣のリザデル (Lissadell House)、ヘイゼルウッド・ハウス (Hazelwood House)、マークレー・ハウス (Markree Castle) など古くからの英国人ジェントリー階層との境界に位置していた。<sup>22)</sup> ポレックスフェン家は海運業で栄えたとはいえ、両者の間には歴然とした階級差があった。イエイツの父親は「私が階級差に腹立たしく思う理由は1つはスライゴ周辺のジェントリーがポレックスフェン家を彼ら

の交友からいつも閉め出したことだ」とロザ・ブット (Rosa Butt) への手紙で書いている。イエイツが1894年にリザデルをようやく訪ねたとき、ポレックスフェン家は同列に扱われたことを大いに喜んだ。

一方、イエイツ家はトーマスタウン (Thomastown, Co.Kildare) に父祖以来の土地をもち、ささやかながら収入を得ていたが、しだいに「強情な小作人」は地代を定期的に入れなくなった。<sup>23)</sup> さらに1880年代の土地戦争のため小作人からの地代は完全に停止した。ジョンがこの年ダブリンに帰ってきたのも土地問題が一つの原因とされる。ゴアブース家などと違って土地法 (the Land Act, 1881) の成立によって小作人が土地所有者となったときイエイツ家は自らの土地を失っていた。<sup>24)</sup> 当時のイエイツ家はみすぼらしいダブリンのラスガー (Rathgar) に家を借りていた。それは「赤煉瓦がスレート葺きの屋根瓦の色と不釣り合いで趣味の悪い家」<sup>25)</sup> だった。

1887年、一家はロンドンに移った。短期間アールズ・コートに滞在したあと、ベッドフォード・パーク (No.3 Blenheim Road, Bedford Park) へ引っ越した。そこは一家にとり賃貸の住宅であったとはいえ、落ち着いて生活できた唯一の家であった。さらに、母の死を契機に、1896年にユーストン駅に近いウォーバン・ビルディングス (18 Woburn Buildings, Euston) にひとりで部屋を借りた。1919年までの20年間そこはアイルランドとロンドンを結ぶ中継基地となった。ある時は、アイルランドから着いたばかりのグレゴリー夫人やモード・ゴーンなどの友人達がまず最初に立ち寄り朝食をともにする場所となった。

以上イエイツの周辺的特徴をみるために、彼の家系と青年時代に住んだ場所をみてきた。この間父に連れられ10回の引っ越しを経験している。1896年までをみると、毎年夏の間スライゴーですごした子供の頃を除けば、ダブリンで過ごしたのは、イエイツが誕生後間もない2歳までと高校時代を過ごした7年間のみである。それ以外の22年間はロンドンで生活している。意外なほどダブリンでの生活は短い。しかし、最も多感な時代を過ごしたのはダブリンであった。とはいえ生涯ダブリンで生活していたなら、アイルランド人

としての問題意識を構成し直すことはできなかつたはずだ。20年以上もその部屋は彼だけの場所としてアイルランドからの郵便の発着地であるユーストン駅の道路を隔てたところにあつたのは象徴的である。そこはアイルランド人がホーリヘッドに着いたあとリヴァプールを経て、最初に行き着く所であり、そこは英国にあってダブリンに最も近い場所であつた。イエイツの家系と居住地から次のことが言えよう。つまり、階級的にも心理的にも彼が19世紀の出世志向のジャーナリスト等と同様に英国・アイルランド社会の境界線上に属していた。それと同時に、過去のイグザイルと同様に、彼はアイルランド人としての強烈なアイデンティティを持っていたということである。次にイグザイルとしてのイエイツを検討していこう。

イエイツがジョイスのように自らをイグザイルとして規定したことはあまり注目されてこなかつた。初期の作品『ジョン・シャーマン』(*John Sherman* 1891)ではアイルランドのアイデンティティを持ちながら、英国の都市に移り住む青年の心の葛藤を描いている。その作中人物ジョンはイグザイルそのものである。また、後年イエイツが朗読を依頼されると最も読むのを嫌った詩といわれる『イニスフリーの孤島』(‘The Lake Isle of Innisfree’)もまた、イグザイルをテーマにしている。さらにロンドンに着いたばかりのイエイツの心境をつぎの書簡は示している。「僕にはロンドンが我慢できません。得るものは何もないのです。劇場は面白くなく、文学者の集りは退屈なばかりです。うんざりするほどの夥しい群衆がいます。僕には、ダブリンぐらいがちょうど性にあっているのです…。」<sup>26)</sup> 当時の彼の書簡をみれば、ロンドンを「恐ろしい」「いやな」(‘horrid’, ‘dreadful’, ‘intorelatable’)という言葉で表現している。つまり移って間もない頃ロンドンに反発を感じアイルランドを思い出すのだったが、彼は現実の貧しいアイルランドではなく架空のアイルランドを想像せざるを得なかつた。

しかしロンドンに馴れるに従って、彼はアイルランドの問題を客観的に再構成し始める。そしてイグザイルという立場から独自のアイルランドを創り

出していった。そのイメージは『心願の郷』、『影深き海』などのケルト的題材を扱った作品につながっていく。アールズ・コート之家に較べてイエイツはベッドフォード・パークの新居が気に入っていたようだ。イエイツはキャサリン・タイナン宛の手紙で新しい新居は「とてもゆったりした住まいです。幸運にも手頃な値段で借りられました。ベッドフォード・パークはこの辺りではロンドンといえないぐらい木々の植えられた静かですべてが美しいところです…。」<sup>27)</sup>と述べている。イエイツはアイルランドの主題を彼独自のやり方で扱い、彼のナショナリズムも衰えることなく続いた。しかし彼は人生の重大な場面でアイルランドよりもイギリスに住むことを何度も選択した。彼は新国家の文化面での建国の父となり市民戦争のさなかにアイルランドに帰り上院議員となった。しかし、最後の10年間には、再び英国とアイルランドとの間を行き来して生活した。

1990年代初頭、イギリス議員選挙で自由党は圧倒的勝利を収め高額所得者・地主階級に不利な税制改革にとりかかったとき、キャスティングボートを握るアイルランド国民党 (Irish Parliamentary Party at Westminster) と連携して保守党に対抗した。しかしそれ以前の1880年代からアイルランド国民党は第3次グラッドストーン内閣以降、自由、保守両党間の第3党としてアイルランド自治獲得を目標にさまざまな取引を行った。<sup>28)</sup> それに呼応するかのようには、ダブリンの知識階級の間で新ナショナリズムといわれる現象が現れ始めた。ある意味で、これはアイルランドが英国化、近代化することで民族の遺産が失われてゆくことへの反発であった。19世紀の後半には言語、土地所有制度、通信手段、商業、人口などの面で劇的な変化があったが、それらの現象はすべて英国化を伴うものであった。

さてイグザイルとしてのイエイツに話を戻すに当たって、彼の周辺の人物についてみてみよう。アイルランド側は併合法に始まり、カトリック教徒刑罰法、クロムウェルの侵略、移民時に抱かれた同胞への偏見などによって、イギリスに対して歴史的に反発と依存の入り混じった感情を抱いていたわけ

である。こうしたなかで Anglophobia 的感情が形成されていった。フォスターの指摘によれば、外国での生活と政治的過激主義者との因果関係は統計的に証明されているという。<sup>29)</sup> 以下フォスターの見解に従って見てみよう。当時その後のアイルランドの革命に携わった指導者の40~50%はイギリスに住んでいたか、またはラーキン (James Larkin) やコノリー (James Connolly) のように移民した後に帰国した家の出身だった。その中の何人かはアイルランド移民が多かったロンドンの出版界からの帰国者であった。彼らには『リーダー誌』の D.P. モーラン (D.P. Moran) や『アイルランドの農民』の編集者である W.P. ライアン (W.P. Ryan) などがいた。ライアンの息子デズモンドは1916年の蜂起時にはパトリック・ピアースの支援者となったが、彼は革命の激しい記録ともいべき自叙伝『シオンを想いて』のなかで、長年にわたって英愛間を行き来しながらダルウィック (Dulwich) で成長した自分自身を描いている。この本は英国に住むアイルランド人の故郷への熱い思いで始まり終わっている。このなかで彼は「アイルランドを離れることは時としてより良く故国を知ることになる。故国のために国を出る者のごく僅かだけがその意味を知っている。国外にでた者はアイルランドが単独でなし得ぬことをアイルランドに代わって行う」<sup>30)</sup> と述べている。このような傾向はその後も引き継がれていった。

さらにこの頃活躍したジャーナリストにロバート・リンド (Robert Lynd 1879-1949) がいる。彼は長老派協会の牧師の子としてベルファーストに生まれた。1901年英国に渡り『デイリー・ディスパッチ』 (*The Daily Dispatch*) に勤めたあと、ロンドンの『ロンドン・デイリー・ニューズ』 (*London Daily News*) に加わり文芸欄の編集者となった。<sup>31)</sup> 彼はロンドンで生活しながら、ナショナリズムやゲール精神に目覚めた新しい世代のナショナリストの一人であった。

シン・フェーンの指導者の多くもまた同じような体験を持っていた。そのような例として、マイケル・コリンズ、アーサー・グリフィス、P.S. オヘガティなどがあげられる。コリンズはコークのかなりの規模の農家の出身であっ

たが、ジャーナリストの見習いをしたあと9年間もロンドンの郵便局や信託銀行などに勤務して生活した。その後、帰国して地下政府シン・フェン議会の蔵相となり、英愛条約の交渉で活躍した。彼は典型的な成功を収めた帰国移民の一人であった。確かに、コリンズの移民体験は彼にとって核となるものであったと言われる。ロンドンでの9年間は彼の故国への想いを神聖化した。<sup>32)</sup>「イグザイルでなかった者はだれも私のことを理解しないだろう。」と彼は述べている。

このように、コリンズやリンドなどのジャーナリストはイグザイルとして英国で得たものを持ち帰った。そしてイエイツもまた彼等と同じ様に彼の鏡に映し出された新たなアイルランドの姿を持ち帰ったといえよう。

#### 4. ホーニマンとイエイツ

変革期にあって、周辺部分に住むイギリス人はどうであったか。彼らは相も変わらず英国や自らに欠けているものをアイルランドに見いだそうとしていた。革命精神をもった英国人は、何らかのきっかけからアイルランドを最初は文化の分野、つぎには政治の分野で自己実現の場とみなしていった。かれらのなかで、過渡的人物の一人として、アニー・ホーニマン (Anni Horniman 1861-1937) がいる。ホーニマンはマンチェスターのクエーカー教徒で富裕な紅茶商人の娘であった。父親は同時に骨董品の蒐集家であり、ホーニマン美術館の創設者でもあった。彼女は学生時代からメイザース夫人と旧知の間柄だったことから、神秘主義結社「黄金の夜明け」のメンバーとなった。さて、彼女はイエイツの長年にわたる友であり崇拜者であったが、不幸の始まりは無意識のうちにイエイツを愛してしまったことである。ある意味でイエイツは彼女にとってアイルランドそのものであった。彼女は1904年にアイルランドに渡ってイエイツのためにアベア劇場を購入した。アイルランドは彼女にとって自己実現の場所となるはずだったが結局はそうならなかった。彼女は投資を続けたものの、彼女が支払ったものは還元されなかつ

た。彼女はアイルランドで新たな演劇運動を実施しようとしたが、独立運動に伴う政治状況そして劇団員との関係から彼女の理想は実現されなかった。最後には、劇場の建物の権利も解かれイエイツとの関係も失った。

ひとつの挿話がある。ホーニマンは資金援助するかたわら、舞台衣装のデザインをおこなっていた。あるとき彼女はイエイツに「私を芸術家と呼ばせてもらえたことに私がどんなに有り難く思っているかあなたはお分かりにならないでしょう」と礼を述べたところ、イエイツは出演者の前で「あなたの『バルアの浜で』の舞台衣装はサンタ・クロースか消防士のようだ」と冷淡に応じたという。<sup>39)</sup> 芸術的な才能にも恵まれなかったホーニマンは経済力に頼らざるを得なかった。彼女は結局アベ座の俳優の個人生活まで管理しようとして反発を受けた。そしてその管理は時として行き過ぎたためグレゴリー夫人はホーニマンのことを電気の通った水の中の1シリング銀貨にたとえている。つまり彼女の援助を受けようと思えば怪我をするはめになるということであろう。

ホーニマンがアベ座から手を引くことになった直接の原因としてつぎのような出来事があった。ホーニマンはアベ座への資金援助の条件として政治を演劇に持ち込まないことを条件としてきた。1910年のエドワード7世の崩御にさいして、英国とアイルランドの劇場はアベ座を除いてすべて喪に服し公演を取りやめた。ホーニマンはその日、平常どおりアベ座で公演がおこなわれたことを不謹慎で政治的な意図があると考えた。実際のところは、アベ座のレノックス・ロビンソン (Lennox Robinson) は他の劇場が公演を見合わせたことを知りグレゴリー夫人に相談したところ「慣例上取りやめるべき」との返事もらった。しかし彼女から返事もらったときはすでに手遅れだった。

ホーニマンはグレゴリー夫人に監督とロビンソンに新聞紙上での謝罪を求めたので、グレゴリー夫人は事実をありのまま記したところ、ホーニマンは事実を曖昧にただけとみなし満足しなかった。ホーニマンはその日の公演を意図的なもの、政治的な判断にもとづいたものと考えたので、ロビンソン

の解雇を要求した。

フランスからウォーバンに帰ったばかりで事情を知らないイエイツは持ち上がった騒動を伝え聞き、ホーニマンに「あなたの援助と保護を受けてきた(演劇)運動をあなた自らが傷をつけてしまったことに私は驚いています」と手紙を書きダブリンに向かった。<sup>34)</sup> とはいうものの、彼女の言うままにイエイツはロビンソンを解雇する気にもならなかった。このような経過をたどってアベ座への援助は打ち切れホーニマンはその後マンチェスターの前衛劇場を開始することになる。

しかしこの事件が持ち上がる前に、ホーニマンはアイルランドから手を引きたがっていた節がある。1907年頃、「アイルランド的なものはみんな嫌悪するようになった」といわれるホーニマンは、イエイツにマンチェスターのレパートリ劇場開設の計画のことを、アベ座の監督には1910年以降資金援助は行わないことを告げた。<sup>35)</sup> その新しいマンチェスターの劇場に誘われたイエイツは、「国籍を変えるには歳をとりすぎた」<sup>36)</sup> と述べて断っている。彼の言わんとするのは、自分に直接の観客が持てるのはこのアイルランドにおいて他はないという意味であった。このような一連の経過からすれば、ロビンソン問題はひとつのきっかけに過ぎなかったといえる。このようにして、有力な後援者と作家との関係は途絶えた。このことをいちばん喜んだのはホーニマンの弊害を恐れたグレゴリー夫人だった。

その後ホーニマンとイエイツはロンドンで一度も逢うことなく、かつての友情を取り戻すことはなかった。晩年になって、2人の印象的な交流についてホーニマンは述べている。イエイツは長年ホーニマンと逢うこともなかったが、ある時ふと昔の友情を思いだし彼の改訂されたばかりの『イエイツ劇作集』(*The Collected Plays*)を出版社から彼女に送ってもらうことにした。それに対して、ホーニマンはイエイツに印象的な礼状<sup>37)</sup>を送った。時の流れが二人の感情を洗い流してしまったといえる。イエイツ69歳、ホーニマン73歳の時のことだった。このようにアニー・ホーニマンの生き方はマージナルな人物像を表している。つまり、彼らは英国では必要とされぬ人間であり、ア

イルランドという異なる文化風土のなかで英国ではなし得ぬ革新的な試みをしようとしたのである。とはいえ、当時の政治状況が彼女の試みを阻んだということも是非言っておかねばならない。

## 5. モード・ゴーンとアイルランド

今世紀初頭のアイルランドは文化・政治の領域で大きな革命期を迎えホーニマンのように多くの周辺的人物を惹き寄せた。その多くはアイルランドに自らの理想を託したのだった。その一人にモード・ゴーン (Maud Gonne) がいる。彼女の少女時代の体験はその後の一生を決定づけるので、やや長くなるがナンシー・カルドッツォに従ってその生い立ちをみてゆこう。<sup>38)</sup>

彼女はエディス・クック・ゴーン (Edith Cook Gonne) の長女として英国のサリーで1866年生まれた。父親はトーマス・ゴーン大尉 (Captain Thomas Gonne) である。モードが生まれてまもなく父親は英国最大の軍事基地カラ (Curragh) に転属となった。彼のアイルランドへの転属は当時激しくなったフィニアン<sup>39)</sup>の反乱を防ぐためであった。モード・ゴーンの物心着いた頃の思い出といえばダブリン郊外のホースのことだった。モードが4歳の時モードの母親エディスは結核の療養のためイタリアへゆく途中病状が悪化し、ロンドンの友人宅にて27歳で亡くなった。ちなみにエディスもまた幼いときに母親を亡くしており、モードは母親と同じ運命を辿ることになったのである。ダニーブルック (Donnybrook) の大きな屋敷には多くの楽しい思い出があった。一家はキルディア (Kildare) に別荘を持ち野山を散策し自然と馴れ親しんだ。母親のいない親子はいっそう親密になった。

当時アイルランド自治の問題が英愛間の政治上の火種となり、保守党と自由党間の駆け引きの材料となり始めていた。グラッドストーン (Gladstone) は反逆罪に問われた囚人達の大半を刑期が終わるまで英国・アイルランドに住まないという条件で釈放した。アイルランドの政治犯ジョン・オーリアリー (John O'Leary) にとってパリは格好の場所となった。そこで彼は芸術家や

アナーキストと交わり、スウィンバーン (Swinburne) やホイスラー (Whistler) と宿を同じくした。しかし1871年、パリは第二帝政が崩壊し混乱した状態となったので、オーリアリーはアメリカに渡り IRB のアメリカ支部のかつての仲間と連絡をつけた。

モードがキルデアにいた頃、新たな社会変革が起こりつつあった。つまりグラッドストーンは土地法案を可決させたのだった。キルデアで過ごした年の終わりにモードはひどい気管支炎に罹った。医師の忠告に従って、ダブリン湾の北側のホース岬に転居することにした。のちモードは「ホース岬ほど美しいところはないように思えた。……時にはその海の色は母親の身につけていたトルコ石のように青く澄み、地中海よりも青かった。……なぜなら灰色の靄がホース岬を霞め神秘的にすることがあったからです。……」と述べている。モードが6歳になる頃トーマスは彼女の教育を考え始めた。村人の子供でさえ読み書きを習っているのに彼女は文字を綴ることもできず、まったく躰ができていなかった。

まもなく英国から家庭教師を雇ったが、彼女はアイルランドの生活に馴染めなかった。やむを得ずトーマスは2人の娘をエディスの叔母のいるロンドンに家庭教師とともに遣った。モードの祖父ウィリアム・クック (William Cook of Roydon Hall) には2人の弟と3人の姉妹がいたが、モードはそのうちの1人の大叔母であるオーガスタ・タールトン (Augusta Tarlton) に引き取られることになった。オーガスタは子供のない未亡人であったが、ハイドパーク・ガーデンズ (Hyde Park Gardens) の大きな屋敷に住んでいた。もともと彼女は2人を引き取ることに消極的であった。モード達は父親から離れたこと、ホース岬の自然を失ったことからなかなか新しい環境に馴染めなかった。ましてやオーガスタはその資力にも拘らず吝嗇であり、豪華な皿に盛られた粗末な食事はホースの貧しい人たちの気前良さと対照的にさえ思われた。日課は厳しく退屈この上ないものであった。8時のお祈りに始まり、家庭教師の授業、ピアノの練習、監督付きの散歩、そしてオーガスタのお供などが毎日続いた。とうとうオーガスタは2人を弟のフランシス・

クック (Francis Cook) に任せることにした。フランシスも吝嗇な生活ぶりは変わらなかったが、リッチモンドの屋敷にはすばらしい庭園と兄ウィリアムから譲られたすばらしい美術のコレクションがあった。その中にはフランドルの画家ヴァン・アイク (Van Eyck) やスペインのバラスケスなどの作品があった。さらにモードにとって幸いだったのはフランシスの妻エミリーが彼女に親切だったことである。家庭教師のおかげでフランス語が上達したモードにフランスで教育を受けるようモードの父に勧めてくれたのも彼女だった。ちょうどこの頃モードの気管支炎が再発し転地を奨められたことも重なって、父トーマスは2人にヨーロッパで教育を受けさせることにした。モードがロンドンを離れたのは10歳の時である。その後の6年間はフランスを中心にイタリア、スイスなどヨーロッパ各地で過ごした。

さて1879年モードが13歳のとき父親が駐在地のインドから帰ってきて、モードの成長ぶりに目を見張った。彼はオペラ、美術館や劇場などのあちこちに彼女を連れていった。ある時は父とイプセンの新作劇やワーグナーの舞台には胸を躍らせた。このような魅力的な女性に成長していったモードはトーマスの大叔母によって社交界にデビューしていった。時を同じくして、パリの別の地区に英国を逃れたオーリアリーがいた。

つぎに、彼女がアイルランド独立の政治運動に参加していった過程をみてゆく。1882年アイルランドでフィニアンによるテロがありトーマスはダブリン城の軍務局長補佐 (Assistant Adjutant-General) として帰任した。モード達は教育を続けるためフランスに留まった。1880年代の10年間はアイルランド内では土地同盟 (Land League) と英国議会内に結成された自治協会 (Home Rule League) によってアイルランド問題が進展していった。両者はいずれもプロテスタント地主パーネル (アイルランド国民党) によって主導されていった。土地同盟は英国地主制を打破し、土地国有化を目標とするものである。自治協会はダブリンにアイルランド議会を復活し、これによってアイルランド内政に限って自治を要求するものであった。<sup>39)</sup> 3年後、19歳になったモードは父の元に帰ってきたとき農民の悲惨な状況を目の当たりに

し、政治的意識に目覚めていった。彼女は後になって「19歳になったとき大きな変化が起きました。……中略……ミッドランズで行われた舞踏会に出かけた時のことです。私はそこでホストが自分の土地に住む農民に立ち退きを要求するのを見たのです。」<sup>40)</sup>と述べている。この立ち退き命令は土地同盟によって農民が不当な地代支払いを拒否しようとした運動の対抗措置として出された。さらにこの頃は不作が続き土地の立ち退きが増えた時期であった。トーマスも農民の惨状には同情を示し、自治協会の候補として英国議会に立候補した。モードはこれを喜んだが輝かしい履歴を持つ軍人がそれを犠牲にして帝国に刃向かうのは勇気のいることであった。

1886年最愛の父親を亡くしたモードはその翌年ロンドンに戻ってきた時、彼女は労働組合や失業者のデモに圧倒された。80年代のロndonは帝政ロシアから逃れてきた革命家などの巣窟であった。モードの親戚のような保守主義者にとっては彼らのようなイグザイルは脅威であった。モードはフィンランドのような革命家やアナキストに興味を惹かれた。彼らは自由と正義のためにすべてを賭ける勇気を持っていたからである。メイフェアやベルグラビア (Belgravia) などの高級住宅街からはスラム街の惨めな生活を窺い知ることはできない。前述のように、この年はイエイツもダブリンからブレンハイムへ引っ越してきた時であり、彼はロンドンの汚れを「ブラック・ホール」(汚らしい場所の意)と述べた。実際にロンドンの貧しい人たちはアイルランドの農民よりもさらにひどい状態であった。当時のロンドンのスラム街で人々の生活ぶりについてはメイヒューなど多くの社会学者の説くところである。モードの親戚の者たちは彼女の政治運動への参加を諦めさせるためあらゆることをやった。モードはゴーン家の祖先について関心を抱き何らかのアイルランドとの関わりを捜そうとした。ゴーン家の祖先は18世紀の初頭にはメーヨー州に土地を所有していたと伝えられるが定かではない。その後トーマスの祖父の代に英国に帰りロンドンでワイン輸入業を行った。アイルランドの土地は売却されたしまったが、スペインからのワイン輸入業がゴーン家の富を築き、当時伯父のウィリアム (William) がその仕事に従事して

いた。彼は典型的なヴィクトリア朝的価値観の持ち主であり、女性の本分は家庭にあって家を守ることだと信じていた。一方、モードはアイルランドの独立を実現しなければならないと考えていた。というのも彼女にとってアイルランドの独立は自分自身の自立と重なってみえたからである。父が亡くなってからは伯父のウィリアムが彼女の財産管理を行っていたが、その伯父に遺産をだまし取られようとしたこともあった。こうしたことから彼女は自立の必要を思い職を探した。看護学を志願したが胸を病んだことからその資格が与えられなかった。モードは仕方なくダブリンで演劇の勉強をやっていた。その後、モードは20歳になって遺産の権利を獲得するまで実に多難だった。ある時は実名で舞台にでていたため伯父のウィリアムから叱責されることもあった。

さてモードはこうした経験を経て成人し、遺産を獲得し、自由を手に入れ夢を実現していった。イエイツはこのようなモードの青春時代をヴィクトリア朝小説の主人公のように思ったという。1889年冬、モードはロンドンにいた。同じ頃ロンドンにはイエイツがいた。彼女はベッドフォード・パークに住む有名な肖像画家ジョンをオーリアリーの紹介状を持って訪ねた。このとき一家は彼女を同胞として歓迎したと言われる。これがイエイツとの交友の始まりである。その後のモードとイエイツの関係については良く知られているとおりである。

モードの幼少時代から政治的意識に目覚めてゆく過程をみてきたが、これは後にアイルランドのジャンヌダルクと呼ばれるほどの女闘士となる原動力となるものであった。つまりその過程は女性の自立とアイルランドの独立を重ね合わせて見ようとしたモードの生き方の源泉となるのだった。また同時に幼児期に得ることのできなかったものをモードは埋め合わせようとしたのかもしれない。英国人として、彼女はサッカーやトロロープと同じようにアイルランドに渡り理想を実現しようとした。しかし、彼女の夢は真の意味で実現されたかどうかは疑問が残る。

お わ り に

19世紀末を中心に英国人のアイルランドとの関わり、並びにアイルランド人の英国との関わりを文学作品・人物像から検証してきた。さらに具体的に言うと中産階級プロテスタントのアイルランド移民の系譜について述べる一方で、アイルランドの文化・政治に関わった英国人（マージナル・マン）の系譜についても考察してきた。両者の類型を明確にしなが、前者の系譜上にある者としてイエイツを、後者の系譜上にある者としてホーニマンとゴーンを検証し、それぞれが果たそうとしたものもみてきたつもりである。

冒頭に述べたように、19世紀末までの英国人のアイルランド観はスペンサー以来大きな変化はなかった。19世紀にアイルランドと関係をもった英国人の態度は2つの面を持っていたといえる。つまり、その文化は腐敗しているため根絶しなければならないとする反面で、アイルランドをアルカディアとみなしたスペンサーの態度の系譜にあるものだった。ホーニマンはこれに続いたが、モードはもっと情熱的にアイルランドと結びついた。ただモードの伝記作者によれば、決して当時のダブリンの人たちに彼女が受け入れられたわけではないと言われる。

アイルランド移民については俗に言う“Hungry Forties”以外にジャーナリストなどの出世志向のプロテスタント中産階級がいた。その流れは、ワイルド、イエイツなどへ続いていった。イグザイルとしてイエイツが創った『影深き海』などにみるケルト的アイルランド像は周辺の英国人（マージナル・マン）の持つアルカディア的理想に結びつき世紀末のケルト民族ブームが起きたと言える。ただ残念なことにそのアルカディア的理念はオリエンタリズムの域を脱するものにはならなかった。これは決してイエイツの本意ではなかった筈である。その後のイエイツは他の面に活路を見いだそうとしていった。それが後の『幻想録』(A Vision)等の超現実的な作品を生むことにもなったと言える。

注

- 1) スペンサーは第6巻9篇と断片の第6篇で羊飼いかリン・クラウトを扱った牧歌の背景として、アイルランドのキルコルマン付近の風景を用いている。それはヴェルギリウスのアルカディアを想定している。  
 Whylome, when IRELAND flourished in fame/Of wealths and goodness,  
 far above the rest/ Of all that beare the British Islands name. —/The  
 Gods then us'd (for pleasure and for rest)/Oft to resort there-to, when  
 seem'd them best:/But none of all there-in more pleasure found,/Then  
 Cynthis; that is soueraine Queene profex/Of woods and forrests, which  
 therein abound,/Sprinkled with wholsom waters, more then most on  
 ground. J.C. Smith and E. de Selincourt (ed.), *The Faerie Queene*, (Ox-  
 ford, 1970), p.398.
- 2) Margaret MacCurtain, "The Roots of Irish Nationalism",  
 Robert O'driscoll (ed.), *The Celtic Consciousness*, (The Dolmen Press,  
 1981), pp.371-382.  
 Edward W. Said, *Culture & Imperialism*, (Vintage, 1993), pp.268-9.
- 3) この理由の1つとして独自の神話を持つことがあげられる。
- 4) エドワード・W・サイード, 板垣他訳, 『オリエンタリズム』, (平凡社 1986),  
 pp.2-9.
- 5) Graham Davis, "Little Irelands", Roger Swift and Sheridan Gilley  
 (eds.), *The Irish in Britain 1815-1939*, (London, 1989), pp.104-129. この論  
 文ではリバプール, マンチェスター, グラスゴー, カーディフなどのスラムの実状  
 を検証し, アイルランド移民についての間違った固定観念を指摘している。
- 6) フリードリッヒ・エンゲルス, 一條他訳, 『イギリスにおける労働者階級の状態』  
 :19世紀のロンドンとマンチェスター (上), (岩波書店, 1991), pp.179-187.
- 7) ロンドンのフィニアン組織の多くのメンバーはそれほど注目されないが, アイ  
 ルランド人の医師だった。彼らはスラム街の同胞に較べて目立たぬ存在だった。
- 8) Emily Bronte: *A Chainless Soul* (London, Hamish Hamilton, 1990),  
 Katherine Frank. 『エミリー・ブロンテ』植松みどり訳, (河出書房新社,  
 1992), pp.36-40.
- 9) *Ibid.* p.36.
- 10) *Ibid.* p.37.
- 11) R.F. Foster, *Paddy & Mr. Punch: Connections in Irish and English His-  
 tory*, (The Penguin Press, 1993), pp.290-1.
- 12) Justin McCarthy, *Reminiscences* (London, 1899), vol. I, p.15. *Paddy  
 & Mr. Punch* より所収.
- 13) Anthony Trollope, *Phineas Finn*, (Oxford, 1869).
- 14) *Paddy and Mr. Punch*, *op. cit.*, p.291.

- 15) George Bernard Shaw, *The Matter with Ireland* (London, 1902), p.10.
- 16) Anthony Trollope, *An Autobiography* (Oxford UP., 1950) p.65.
- 17) *The Kellys and the O'Kelly's* (London, 1848).
- 18) フルードのアイランド人観は以下の引用にもうかがえる。‘There are many ways in which a conquered but still reluctant people may be dealt with, when the interest of the conquerors is rather in the country itself than in the inhabitation who occupy it. They may be exterminated, either wholly, as the Red races may be exterminated in North America,....’ James Anthony Froude, *The English in Ireland in the Eighteenth Century*, Vol.1, (AMS Edition 1969), p.14.
- 19) Joseph Hone, *W.B. Yeats*, (Pelican Books, 1971), pp.1~3.
- 20) Lord Dunboyne, *Butler Family History*, (Dublin, 1966), p.29.
- 21) ジョンはマン島の学校時代の学友ジョージ・ポレックスフェンの妹スーザンと結婚したが、ポレックスフェン家が弁護士志望の有望な青年を喜んで迎えたことは言うまでもない。1866年、ジョンが法廷弁護士の資格を得たにも拘らず、司法の道を捨て画家になろうとしたとき、妻となったスーザンは反対し画家としてのジョンを認めようとしなかった。ジョンはこれを世俗的で出世欲の強いポレックスフェン家の血と考え嫌った。
- 22) 拙論参照。『W.B. イエイツとナショナリズム』, 「桃山学院大学人文科学研究」 21・3.(1985)。
- 23) Joseph Hone, p.25.
- 24) その土地は626エーカーの広さがあり、当時464ポンドの価値があった。(Joseph Hone, p.9)
- 25) W.B. Yeats, *Autobiographies*, (Macmillan, 1955), p.83.
- 26) *The Letters of W.B. Yeats*, p.43. June, 1887.
- 27) *The Letters of W.B. Yeats*, p.64. March, 1888.
- 28) 1885年の総選挙でアイランド国民党はアイランドの議席103のうち85を獲得した。
- 29) R.F. Foster, *Paddy and Mr. Punch: Connections in Irish and English History*, (The Penguin Press, 1993), p.299.
- 30) *Ibid.*, p.301.
- 31) Robert Hogan, *The Macmillan Dictionary of Irish Literature*, (Macmillan, 1980).
- 32) R.F. Foster, p.301. *op.cit.*
- 33) Adrian Frazier, *Behind the Scenes: Yeats, Horniman and the Struggle for the Abbey Theater*, (London, 1990), pp.164-5.
- 34) Hone, *op.cit.* pp.241-3.
- 35) James W. Flannery, *W.B. Yeats and the Idea of a Theatre: The Early Abbey Theatre in Theory and Practice*, (1976, Yale U.P.), p.225.

36) *Letters, op.cit.* pp.500-501.

37) 「前のことになりましたが、あなたは刊行されたばかりの劇作を私に献本するよう出版社に指示されました。私はその本を最後まで読んでみようと思いました。というのも、何年かまえに著者に手紙を書いて、読者から得た喜びを感謝するのはすばらしいことだとあなたがおしゃったことを今も覚えているからです。しかし、長らく病気がちだったので読みとおすのは時間がかかりましたが、その本をととても楽しみました。特に私がとても親しんでいる劇になされた修正箇所にとこのほか興味を抱きました。私のところに本を送ることを考えていただいてとても感謝しています。....」 Hone, *op.cit.*, p.245.

38) Nancy Cardozo, *Maud Gonne*, (1978, New Amsterdam), pp.12-43.

39) 大野真弓編『イギリス史』, (山川出版社, 1975) pp.469-471.

40) Nancy Cardozo, *op.cit.*, pp.40-41.

その他の文献として以下のものを用いた。

Robert Hogan (ed.), *The Macmillan Dictionary of Irish Literature*, (Macmillan, 1980).

M. Dorothy George, *London Life in the Eighteenth Century*, (Penguin Books, 1965).

Lewis P. Curtis Jr, *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*, (David & Charles, 1971).

Roger Swift (eds.), *The Irish in the Victorian City*, (Croom Helm, 1985).

Denis Donoghue (ed.), *W.B. Yeats: Memoirs*, (Macmillan, 1972).

Stanley Weintraub (edited & annotated), *Bernard Shaw: The Diaries 1885-1897 vol.2*. (The Pennsylvania State University 1986).

大浦幸男, 『イエイツをめぐる女性たち』, (山口書店, 1987).

## W. B. Yeats and Maud Gonne: A Poet in Exile and a Dreamer

Ryuhei Kusaka

In recent years, there has been a growing inclination to re-examine the way that Irish exiles was perceived by British contemporaries in colonial England. The purpose of this study is to investigate the interaction between Irish exiles and British dreamers at the end of the nineteenth century.

The image of Ireland in the colonial age was derived from the Elizabethan poet, Edmund Spenser. While he had distaste for the rebel Irish, he regarded the charming landscape of Ireland as an Arcadia. This Spenser's point of view was sustained by William Makepeace Thackeray and Anthony Trollope. At the end of the nineteenth century, some British people used Ireland as a stage for their dreams and ideas, such as Ann Horniman and Maud Gonne. Their viewpoints were based on a kind of colonialism. It is no exaggeration to say that 'Celticism' might be approximated to 'Orientalism'.

In the 1880s, a certain kind of Irish literary emigrant was advancing to prominence. Oscar Wilde, George B. Shaw and W.B. Yeats were three examples of a breed which can be traced back to middle-class Irishmen on the make, who were mainly engaged in the journalistic profession in England. They were not the average Irish emigrant. One of the typical examples was Justin McCarthy who migrated from Cork journalism into the world of Fleet Street, and afterwards became a Parnellite MP.

W.B. Yeats spent his youth travelling back and forth between England and Ireland. His view of Ireland is inseparable from his emigrant status. Consequently, he could discover or re-create the image of Ireland, as seen in *The Shadowy Waters*.

M. Gonne, who had spent her childhood in Ireland, was magnetized to the revolutionary era in Ireland. She identified Ireland's independence with her own independence.

In this study, therefore, the interaction between Yeats and Gonne will be dealt with as one between an exile and a dreamer.